

思っている、比較される現実はどうにもできないじゃないですか？私が音をあげたら次の女性はないなっていうプレッシャーも大きかったです。それと、配属時に野菜の指導員は自分を含め3人いて、それが翌年、1人定年退職。その後、もう1人が異動。3年目にして私だけになってしまったんです。正直きつかったですね。「私がやったから生産が落ちた、技術力が落ちたとは言われたくない」として必死でした。

お姑さんは何もなくていいって言ってくれるんですけど、嫁としてそれじゃダメだなっていう気持ちもあって。子どもも「ばあちゃんに任せっきりで家のことを何にもしない」って言うわけですよ、その家その家で色々あっていいはずなのに。「母親は家事をするのが普通」って考え方を子どもなりに持ち始めていて。もし私が男だったら、バリバリ仕事して毎日帰りが遅くても、休日に家族ケア出来ればそれでOKって納得できるはずなんですよ。女だからこそその仕事と家庭の悩みなんだと思いますね。

佐藤昌子さん（昭和54年、真室川町生まれ。）

JA真室川で営農販売課に所属する女性初の営農指導員。農に関わる仕事がしたいと、大学でも農業を専攻するが、そこにたどり着くまでには長い道のりが…。二児の母・妻・嫁として、「こうあるべき」という理想と、「自分の代わりはいない」という仕事の間で揺れながら、目の前のことに全力で挑むパワフルウーマン。

たいんですよ。一日の時間をどううまく使うか、やりくりが難しい。いつも分刻みで動いています（笑）。

Q 地元真室川の好きなきなこころ嫌いなところは？

何といっても、農業ができる土地だということですね。農家が儲からないっていうのは違う。農業はやった分だけ自分に残る、やり方次第で一番良い仕事だと思っています。農家で育って、今も仕事で関わっているからそう思うのかもしれませんけど。それと、よく学校や保育園とかで、農業体験があるじゃないですか？農業って地域の基幹産業っていうだけじゃなく「食」でもあるので、子どもの成長や私たちの暮らしに直結していると思います。それに関わる仕事がいっぱいできるところは素晴らしいと思いますね。

逆にマイナスは、男より女のほうがやらなきゃいけないことが多いってことですね。家事だって決して平等じゃないし、嫁は娘とは違う、どこか自分の中でそう思うところがあるって感じます。「女はこうじゃなきゃ、嫁はこうあるべき、母親は子育てをしなければいけない」って、誰かに言われたわけではないんですけど、周りがそうだから自分もそうじゃなきゃって思ってしまうのは、やっぱりこの地域だからかもしれないですね。同居と核家族でもまた違うかもしれないけど。あと、「女は男の言うことをきけ」みたいな人も多いんじゃないかな？

Q 最上地域の女性へメッセージ

やるって決めたらやってみる。とことんやってそれで駄目なら仕方ないけど、でないとあきらめられないじゃないですか？やらないであきらめるなんて私にはできません。どうしようかうただしてる時間ももったいない。

あと、自分に甘えない。何かを成す人はチャレンジしてると思うし、無理だと言っちゃらない人はそこで止まってしまうと思うし。自分がこうなりたいて思ったら、とにかく始めないと始まらないと思いますね。何事もやってやれないことはないと思ってるので。何事も自分次第ですよ。子どもにもキアラ弁を要求されたら、「キー！ー」って（笑）。自分で自分の首を絞めてるだけかもしれないですけど（笑）。

